

滋賀県立琵琶湖博物館

第三次中長期計画

令和6年度（2024年度）内部評価

令和7年（2025年）9月

内部評価 総評 (館長による評価)

第三次中長期基本計画の4年目は、3年目の内部評価・外部評価を受けて計画の見直しを行い、事業目標の実現に向けて活動を行うとともに、計画の中間見直しに向けた検討を開始した。

「事業目標1」については、琵琶湖に関する紹介ページを日本語・英語両ウェブサイトに掲載し、3件の論文を「公表した研究成果の解説」のサイトに追加するなど、重点事業1-2における研究成果の国内外への発信は順調に進んでいる。1-1の琵琶湖の価値を高める研究の推進については、総合研究の成果公開として水草と人の関係についての企画展示開催と、令和7年度の歴史的な治水手法に関する企画展示の準備を進めた。最終とりまとめに向けて、成果公表を進めていく必要がある。次期総合研究については予備的な研究の準備を進めているが、さらなる研究のブラッシュアップが必要である。1-3の研究の環境整備と活性化については、機器の導入により研究成果も出しているが、予算削減の中、備品更新計画の再構築が課題である。

「事業目標2」については、トラックヤードのシャッター修繕や収蔵空間のLED化、代替燻蒸ガスへの変更を含むIPM体制の更新により、重点事業2-1の標本・資料の管理体制強化が大幅に進んだ。2-2の標本・資料の整理と公開については、収蔵資料データベースの新規公開や更新により順調に進んでいる。今後は標本・資料の利用促進と収蔵スペース不足解決に向けた取り組みを進める必要がある。DX事業により、3D画像や新規ウェブ図鑑、WebGISなど最新のコンテンツを公開するとともに、展示室内でウェブコンテンツを公開できる設備の更新を行うことで、2-3の「だれでも・どこでも・いつでも」使える博物館の創出を進めた。

「事業目標3」については、びわ博フェス2024において協働的な仕組みである「フェスとも」という制度を導入することで、多様な主体の参加を促進し、重点事業3-2の出会いの場の創出を進めた。来年度以降へのさらなる改善・展開に向けて、制度の充実や運営方法の工夫が必要となっている。びわ博フェスや地域・企業連携における地元企業や地域団体によるワークショップの増加により、多様な主体による交流イベントが増えた。今後はニーズをさらに分析し、職員の負担を軽減する運営方法を検討しながら、3-1に掲げる幅広いニーズに応える交流事業の充実を図る。3-3の琵琶湖学習の支援については、具体的な活用を意識した教職員研修の実施により、学校現場での活用を希望する教職員を増やすことができた一方で、体験学習の導入や指導方法への不安を感じるという意見も一部あり、さらなる研修の改善が課題となっている。

「事業目標4」については、展示室内でYouTubeチャンネルへのアクセスが可能となり、アクセス用QRコードの設置によって利便性も向上したため、重点事業4-2に掲げる「観る+使う」展示への成長を概ね順調に進めることができた。今後はDX事業の成果の活用等により、さらなるコンテンツの充実を図る。4-3の社会の変化や研究成果を反省させた展示の成長については、最新情報をもとに各展示室で小規模な展示更新を行うとともに、それに基づく企画展示やギャラリー展示、トピック展示を実施した。しかし、破損したビワコオオナマズ水槽の再生については、工事の調整に時間がかかり、完成と公開は翌年度繰越となっている。音声ガイドアプリ「ポケット学芸員」については、中国語の追加が令和6年度内に実現できなかつたため、4-1における誰もが楽しみ学べる博物館展示への成長はやや停滞気味となった。今後はさらなる展示の充実と利便性向上を進め、展示室での学びの深化を進める必要がある。

「事業目標 5」については、DX 事業の成果として博物館のウェブサイトに「デジタル琵琶湖博物館」を公開することで、重点事業 5-1 の ICT を利用した琵琶湖の魅力とその入口としての博物館の紹介を進めた。今後は内容をさらに充実させ、資料提供や SNS を活用して利用を促進するとともに、常設展示室との連携を強化して、展示室とオンラインの双方から琵琶湖の魅力を感じができる環境を整備する。また、湖上交通を活用した新たな来館手段の導入や、駐車場や船着場から博物館への道案内動画の公開を行うことで、5-3 の来館しやすい環境の整備を進めた。さらに、展示室以外の博物館の利用実態についての調査方法を検討し一部試行を行うことで、5-2 の双方向の広報や各種調査・評価による情報収集と事業への反映を進めた。今後、社会評価の情報収集を見えた継続的なデータ収集と解析の仕組みを構築する必要がある。

「事業目標 6」については、重点事業 6-1 の老朽化した施設の改修を進めるため、引き続き大規模な施設改修を進め、令和 7 年度の設備改修予算を確保するとともに、当館独自の施設設備修繕計画を策定した。今後は専門業者による施設や機械設備の健全度判定調査を実施する必要がある。災害への備えとしては、マニュアル整備と年 2 回の訓練を引き続き進めている。今後、一時避難所としての施設設備も進める必要がある。6-2 の安定した活動基盤を確保する仕組みづくりについては、令和 5 年度に引き続き、破損した水槽の再生に向けたクラウドファンディングや寄附の取り組みを実行した。さらに、期間限定の募金箱の設置を実現し、多様な人々が容易に支援を行えるようにした。施設の老朽化への対応や活動基盤の確立は、博物館の持続的経営に不可欠であるため、今後とも長期的視点から計画的な取り組みを進めていく必要がある。

全体として、第三次中長期基本計画の目標に向かって少しづつ成長、発展してきており、特にウェブサイトでの研究成果や標本・資料の公開促進により、琵琶湖の魅力発信や博物館利用の促進が進展しつつある。また、オンラインと同じ情報を展示室で利用できる環境も整ってきた。多様な主体の参加や協働による活動も増えてきており、出会い系としての博物館の機能も定着している。一方、研究や資料保存、展示室などの環境整備や施設設備品の更新、安定的な予算確保については、できうる限りの努力はしているものの、抜本的な対応に迫られている部分も多い。これらの課題については、本計画の後半見直しの中で、より一層の検討と対応を進めていく必要がある。

○事業目標 1 琵琶湖の魅力を深く掘り下げ、世界に紹介

- ・**実施目標**：琵琶湖やその周りの暮らしの価値を地域の人々や国内外の研究者とともに発見し、その魅力を国内外に広く発信します。
- ・**評価指標**：地域の人々や研究者など多くの人による琵琶湖や湖と人間の研究が発信される

・内部評価

重点事業 1-1 の研究の推進については予定通り進捗しているが、現行の総合研究の成果公表は企画展以外は十分進んでいないので、その点での努力が必要である。また次期総合研究は、テーマの検討と予備的な研究の計画はできた。大きな研究として成立させるためには R 7 年度の研究でプラスアップをする必要がある。以上を鑑み、この事業については 75%程度の達成状況と考える。

重点事業 1-2 は順調に進んでいる。情報発信のための枠組みは整ってきたので、今後は自身の充実を加速する必要がある。年度を通しての達成状況は 90%と考える。

重点事業 1-3 は良く進んだ部分と停滞した部分がある。基盤的な備品の更新計画の改訂が進まなかつたため、研究の活性化という視点ではもたついている。このため、年度内の目標の達成は 50%と考える。

・各重点事業の目標と実施状況

1-1. 世界有数の古代湖としての琵琶湖の価値を高める研究の推進

総合研究「琵琶湖と集水域の過去 150 年間の環境変遷の解明」は成果の取りまとめの段階に入った。また成果公開の第一弾として、水草と人の関係について企画展示を開催したほか、第二段となる令和 7 年度の企画展（歴史的な治水手法）の準備を進めた。新たな総合研究については、様々な人々との共同による博物館活動をテーマに、令和 7 年度に予備的な研究を開始する準備を進めた。

1-2. 研究成果を国内外に発信し、琵琶湖の魅力を人々に伝える

琵琶湖に関する紹介ページを日本語・英語両サイトに掲載した。また、公表した論文のうち 3 件を「公表した研究成果の解説」に追加した。後者についてはまだ数が少ないので、掲載を促している。研究成果の公表数は例年並みであった。

1-3. 研究の質を高める環境の整備ならびに研究の活性化

伊藤忠商事との連携研究によりアユモドキの繁殖に 7 年ぶりに成功したほか、電子顕微鏡を使用した共同研究や DX 事業で導入した機器による研究の進展などの成果が出ている。大型備品の調達としては従来の順番を入れ替え、栄養塩分析装置の購入を申請して予算化された。

他方、500 万円までの研究機器類は予算が削られる一方で停滞したままである。調達計画の再構築に着手したが、R6 年度は未完成で終わったので引き続き計画策定を行う予定である。

○事業目標2 資料を未来に残し、どこからでも使えるように整備

- ・**実施目標**：貴重な標本・資料を将来にわたって人々が利用できるよう、適切な整理・保管を進めるとともに、ICT を活用した利用方法の開発により、琵琶湖博物館の知的資源を「だれでも・どこでも・いつでも」使えるように整備します。

- ・**評価指標**：整った環境で保管されている湖と人間の資料・情報がどこからでも使えている

・内部評価

標本・資料の適切な管理体制については、収蔵空間の設備(シャッター修繕、収蔵空間のLED化)・IPM管理体制(燻蒸ガスへ更新)の強化が大幅に順調に進んだ(年報4-3参照)。

標本・資料の整理については、新たな収蔵資料データベース(DB)の公開や、ホームページ上の表示を変更するなど、概ね目標は達成した(年報4-1-(7)参照)。今後は資料の利用促進を推進するとともに、収蔵スペースの不足の問題を解決するための予算確保に努めたい。

「だれでも・どこでも・いつでも」使える標本情報を中心とした知的資源の整理について、写真、動画、3Dコンテンツの蓄積、新規のウェブ図鑑の公開、展示室にウェブコンテンツを開ける設備の更新(年報4-2-(7)参照)と、実施目標に向かって概ね順調に進んでいる。

・各重点事業の目標と実施状況

2-1. 標本・資料の管理体制の強化

収蔵空間の保管・作業環境の改善：長年の課題であったトラックヤードに設置されたシャッターの修繕や収蔵空間にあるほぼ全ての照明をLEDに交換することができた。

環境改善に向けた予算申請：地学収蔵庫の収蔵棚増設について令和7年度当初予算枠外要求に申請したが、通らなかった。本件については、今後も粘り強く申請するつもりである。

IPM体制：これまで使用していた燻蒸ガスの販売終了にそなえ、代替ガスの情報収集と代替ガスの確定・予算確保をした。幸い予算は確保され、IPM体制を更新することができた。

防黴に対するリスク管理：目に見えない汚れや菌の存在を光で可視化できるルミノメーターの導入をすることにした。今後は「予防」に力を注ぐIPM体制を構築する予定である。

2-2. 標本・資料の整理の推進と公開による利用促進

ホームページ「収蔵資料DB」の更新：採集場所などの表記項目を増やし、閲覧者の活用しやすいものにした。また、コケ植物のパケット標本を新たに公開し、英語版とも連携させた。

新規マニュアルの作成：DBの表示項目の更新等、DB全体に影響を与える操作に関して、新規にマニュアルを作成することで、操作上の問題の起こる頻度を減らす対策を講じた。

2-3. ICTを利用し、だれでも・どこでも・いつでも使える博物館を創出

ウェブ図鑑の公開：ホームページ内の「ウェブ図鑑」に新たにデジタル博物館というコンテンツを追加し、3D画像や電子図鑑(琵琶湖いきもの図鑑)、WebGIS等の最新のコンテンツを開いた。

展示室へのコンテンツ提供：常設展示のふれあい体験室や企画展示室にLANを配線し、上記の最新コンテンツを配信する準備を整えた。また、常設展示内にQRコードを設置し、博物館のYoutube動画などを閲覧できるようにすることで、ICTを駆使して楽しめる展示へ貢献した。

○事業目標3 みんなで学びあう博物館へ

- ・**実施目標**：交流事業を知識や経験を交換し合う「学びあいの場」と位置づけ、さまざまな人々や組織と連携して充実を図るとともに、参加する人の相互の出会いが新たな活動につながる環境を創ります。
- ・**評価指標**：利用者が実施者になった多様な交流事業が実施される学びあいの場で情報交換が行われる

・内部評価

多様な主体が参加する交流事業は、びわ博フェスを中心に展開されており、教員研修などの学校連携事業を通じて、知識や経験の共有が深まりつつある。これらの事業は、利用者の新しい活動につながる方向性で進められている。特に観察会や環境学習、びわ博フェスといったイベントのアンケートでは、「これまで関わりのなかった団体や個人と交流できた」「さまざまな活動を知ることができた」「琵琶湖の新たな魅力を発見できた」といった肯定的な意見が多く寄せられた。このことから、現在進めている学びや協働の取り組みをさらに強化すべきであると感じられる。また、協働的な仕組み「フェスとも」の導入は効果を上げたものの、多文化・多世代が参加しやすく、継続的な関係を築くためには、内容や運営方法のさらなる工夫が必要である。さらに、学校連携事業では、研修の充実や指導方法の改善が今後の課題として挙げられる。

・各重点事業の目標と実施状況

3-1. 幅広いニーズに応える交流事業の充実

アンケート結果や地域の要望があった観察会、田んぼ体験、わくわく探検隊などの交流イベントを例年通り実施した。これらのイベントは共催団体との協力のもと進められ、地域連携の依頼が増えたことで、外部団体が主体となり、当館が支援する形が増加している。また、びわ博フェスでは、企業や地域団体によるワークショップや取り組みを実施し、イベントの対象や分野を広げることができた。このように順調には進んでいるものの、地域連携事業では職員の負担を軽減するための運営方法の工夫が必要である。今後は、ニーズをさらに分析し、参加者の対象や活動分野の多様化を推進するとともに、研究と連携した学芸員による活動、多様な主体との協働事業の充実を図る方針である。

3-2. 出会いの場の創出

びわ博フェス2024では、多様な主体が参加し、企画・運営に携わることができるイベントを目指し、「フェスとも」という新しい制度を今年度より導入した。この制度には、はしかけやフィールドレポーター、企業、学校教育関係者が参画しており、開催前後に意見交換の場を設けることで、来年度以降の改善点を検討した。「フェスとも」の制度そのものの充実や運営方法の工夫は必要であるが、博物館と連携しながら交流事業の新たな仕組みを構築できたため、概ね進んでいる。

3-3. 「深く学ぶ力」に基づく琵琶湖学習の支援

過去3年間の追調査を計画していたが、受講者が同じ学年を担当しない場合や、毎年受講者が異なることが多く、研修での体験的学習の成果を明確にするのは困難だと考えた。そのため、受講直後に「研修で学んだことを今後学校現場で活用する予定か」を問う意識調査に切り替え、来年度の教職員研修の改善に役立てることとした。今年度の教職員研修では、学校現場を具体的にイメージしやすい内容を重視し、プランクトン観察や化石レプリカ作りなどの体験型ワークショップ、校外学習用のワークシート作りを実施した。「研修後のアンケート」では、約8割の受講者が研修内容を学校現場で活用したいと回答した。また、ワークシート作成や理科授業でのプランクトン観察を実際に行いたいとの意見も寄せられた。さらに、研修内容を校内で共有したいと考える受講者も多く、概ね順調に進んだといえる。一方で、体験学習の導入方法や指導方法に不安を感じる声も一部で見られた。今後は、より実践的で受講者がイメージしやすい研修方法の検討が重要である。

○事業目標4 もっと使いやすい博物館へ

- ・**実施目標**：琵琶湖を知る「入口」としての展示を、より使いやすく、常に成長する展示として発展させます。
- ・**評価指標**：湖と人間の最新情報が常に得られ現場への興味をもつ人々が増える

・内部評価

展示室では、最新情報をもとに展示内容の更新を随時行い、それに基づく企画展示やギャラリー展示、トピック展示を実施した。また、職員や地域住民による活動が来館者に伝わるよう、オープンラボでの活動を推進し、展示室内でもその取り組みを紹介した。ICTを活用した展示室内ガイド「ポケット学芸員」は、日本語と英語の2言語でサービスを提供しており、来館者の利便性向上に貢献している。さらに、展示室におけるICTによる深いコンテンツアクセス環境は順次改善され、YouTubeチャンネル「びわこのちからチャンネル」への動画アクセスが可能となった。今後は、DX事業の成果を活用しながら、具体的なコンテンツをさらに充実させ、展示室での学びの深化を図る取り組みを継続する。

・各重点事業の目標と実施状況

4-1. 誰もが楽しみ学べる博物館展示への成長

音声ガイドアプリである「ポケット学芸員」では、日本語（令和4年度～）および英語（令和5年度～）の2言語による展示解説文と音声による説明を提供している。さらに、中国語の追加が準備されているものの、令和6年度内には実現しなかったため、やや停滞気味である。今後早期の実現を目指していく。加えて、スペイン語およびポルトガル語のテキストデータが既に用意されていることから、今後は音声データの追加についても検討を進める。

4-2. 「観る」展示から「観る+使う」展示への成長

展示室内のインターネット利用環境が改善され、電子図鑑や「おうちミュージアム」のコンテンツに加え、YouTubeチャンネル「びわこのちからチャンネル」の動画にアクセス可能となつた。また、展示室内にはアクセス用QRコードを設置し、来館者の利便性向上に貢献している。進捗は概ね順調であり、今後はさらに多くの動画やDX事業の成果物へのアクセス拡充を図り、展示室での利用価値を向上させる予定である。

4-3. 社会の変化や研究成果を反映させた展示の成長

全ての常設展示室で、展示内容の更新を行い、小規模な展示更新を複数実施した。予算の制約で大規模更新は行えなかつたものの、引き続き機器類（照明や映像など）の更新や展示手法の見直しを進めている。また、ビワコオオナマズ水槽などの展示再開については、琵琶湖の深い場所にいるオオナマズの雰囲気を感じられ、多方向から見ることができる展示等見直しすることとしているが、工事の調整に時間がかかつたため、翌年度に繰り越している。企画展示およびギャラリー展示では、最新の研究成果を親しみやすい形で利用者に提供している。さらに、トピック展示を含む多様な企画の実施に際して、試験研究機関や地域で活動する個人や団体との協働を進め、内外の協力を得ながら展示内容の充実と成長を図っている。このため、評価としてはやや進んだといえる。

○事業5の目標 より多くの人が利用する博物館へ

- ・**実施目標**：ICT を活用し「世界」を見据えた広報を展開して、より多くの人の利用を実現します。また、双方向の広報によって常に博物館の社会的評価を情報収集し、博物館の魅力向上に役立てます。
- ・**評価指標**：館内および館外からも利用がしやすくなり利用者が増える

・内部評価

デジタルコンテンツ各種の公開を行ったことによって、博物館から発信する各種情報の充実を順調に進めることができた。次年度以降は、内容をさらに充実させ、資料提供や SNS を活用して利用促進を目指す。また、常設展示室との連携を強化し、展示室とオンラインの両方から琵琶湖について学べる環境を整備する計画である。

来館者調査では把握できなかった多様な博物館利用の評価方法を検討し、一部試行を実施できた。今後、社会評価の情報収集を見据えた経年的なデータの蓄積と解析が可能な仕組みを構築する必要がある。

さらに、新たに湖上交通を活用した来館手段が導入され、これまで来館していなかった層の興味を引き出すことができた。今後の誘致の期待が高まるなど、情報発信と博物館の社会的評価情報の収集により、さらなる博物館の魅力向上に向けて順調に取り組みを進めることができた。

・各重点事業の目標と実施状況

5-1. ICT を利用した琵琶湖の魅力とその入口としての博物館の紹介

博物館のホームページに、「電子図鑑」、「3D 図鑑（考古、動物）」、および「びわはく GIS」を公開できた。「電子図鑑」では県内の動物を条件設定して検索できる機能を提供し、「3D 図鑑」を通じて博物館資料の一部をオンラインで観察可能とした。「びわはく GIS」により滋賀県の動物や民具資料の種類や分布状況を公開する基盤を整備した。これらのコンテンツは「デジタル琵琶湖博物館」として、ホームページトップの回転式バナーに配置し、簡単にアクセスできるようにした。

5-2. 双方向の広報や各種調査・評価による情報収集と事業への反映

アンケートの調査方法見直しを進め、従来の来館者アンケートに加え、展示室以外の利用実態（イベント参加、団体利用など）の定期的な調査方法を検討した。特に、はしあけ会員やフィールドレポーター会員を対象に試験的なアンケート調査を実施し、活動の実態把握を試みた。また、学校などの団体利用に関して、定量的データの収集方法について担当者間で協議した。

5-3. 来館しやすい環境の整備

おごと温泉観光協会及び（株）李兵衛造船所と連携し、家族旅行者を主な対象とした県内周遊メニューとして、湖上交通を活用した観光・環境学習連携事業を夏季限定で 6 回実施した。この取り組みは利用者から好評を得たため、来年度から定期便として琵琶湖博物館とおごと温泉港、新たににおの浜観光桟橋を結ぶ航路が開設される。ソフト面の対応として駐車場から博物館までの誘導については、わかりやすい道案内動画を作成し、WEB 上で公開した。併せて船着場からの博物館までの道案内動画も作成した。

○事業6の目標 博物館の活動を安定して継続する

- ・**実施目標**：老朽化した施設の改修や、災害に強い体制の確立を進めるとともに、活動基盤の安定のために、さまざまな支援を受ける仕組みづくりを進めます。
- ・**評価指標**：安心感がある場所で安定的に継続した活動ができる

・内部評価

当館建物の基幹部分については、全序的な長期保全計画に基づいて計画的に更新しているが、その対象外の施設・機械設備等の改修について、当館独自の施設設備修繕計画を策定した。今後は、これらの計画に沿って修繕を行っていくことになるが、施設や機械設備の健全度の判定には高度な専門知識が必要であり、専門業者による診断なども踏まえ、当館の将来像を見据えた長期的な更新計画を進めるべきである。

支援を受ける仕組みづくりは、破損した水槽を含む水族展示室の再生に向け、クラウドファンディングや支援寄附などの新たな制度を令和5年度に立ち上げた。これを令和6年度も実施することで、多くの方からの支援を受けることができた。さらに、クラウドファンディングだけでなく、高齢者や子ども、外国人など、募金を希望するすべての人が容易に支援を行えるシステムの要望があり、当館への支援の関心度の高さが伺われた。その対応として、期間限定で募金箱を設置することにより、より多くの方からの支援をうけることができた。

・各重点事業の目標と実施状況

6-1. 老朽化した施設の改修と災害への備え

大きな施設改修は、ショップとレストランの空調設備、博物館資料の管理上重要であるトラックヤードのシャッターを更新した。令和7年度に向けて、受変電設備、中央監視設備、高圧電力引込設備、防災設備、防犯カメラの更新やLED照明への切り替えなどの予算を確保した。

災害時の対応については、全体調整後のマニュアルを整備し、訓練を2回実施した。また、国民保護法に基づく緊急一時避難施設の指定の依頼を令和6年10月10日に受け、同意した。今後は、一時避難所としての役割を踏まえた施設整備も進める必要がある。

6-2. 安定した活動基盤を確保する仕組みづくり

○クラウドファンディング

	令和5年度	令和6年度	計
資金使途	トンネル水槽円形容 1つのアクリル交換費、「よみがえれ！日本の淡水魚コーナー」の水槽などのアクリル交換	ビワコオオナマズ水槽、コアユ水槽の新設費用	
実施期間	令和5年11月15日～ 令和6年1月31日	令和6年8月28日～ 令和6年11月25日	
実施日数	78日間	90日間	168日間
目標額	500万円	2,000万円	2,500万円
支援額	1,159万3,000円	1,773万9,702円	2,933万2,702円
支援者数	796者	866者	1,662者

○水族展示再生支援寄附 令和5年度 14件 12,045,000円

令和6年度 24件 12,310,000円

○募金箱 305,255円(期間 R6.10.18～R6.11.25、R7.1.18～R7.3.31)

個人や法人に向けたクラウドファンディングや寄附支援制度、館内で容易に寄附ができる募金箱の設置など幅広い対応を行い、多くの支援を頂くことができた。